



TITLE:

第3章 京都大学北部構内BF32区の 発掘調査

AUTHOR(S):

千葉, 豊

CITATION:

千葉, 豊. 第3章 京都大学北部構内BF32区の発掘調査. 京都大学構内遺跡
調査研究年報 2016, 2014: 111-140

ISSUE DATE:

2016-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226461>

RIGHT:

第3章 京都大学北部構内B F 32区の発掘調査

千葉 豊

1 調査の概要

本調査区は京都大学北部構内のほぼ中央、北白川扇状地の末端付近に位置し、北白川追分町遺跡の範囲内にある（図版1-402，図74）。ここに自家発電設備の設置が計画されたため、周辺地区の調査成果を勘案して、工事区域全域の発掘調査を実施した。調査は2013年10月29日に開始し、11月15日に終了した。調査面積は約90m²。調査の都合上、調査区南半（南区）の調査を最初に実施し、その後に北半（北区）の調査をおこなった。

本調査区周辺は、縄文時代の遺跡の中心地に位置しており、過去の調査で多くの調査成果が示されている。とりわけ、本調査区の北数mの123地点第1トレンチでは、縄文中期末の住居跡が発見されているほか、今回の調査区の中に含まれる123地点第2トレンチからは、縄文中期中葉～後葉を中心とする多量の遺物が発見されている〔清水1984〕。

こうした過去の調査成果から、今回の調査では縄文時代の遺構・遺物の検出や当時の地形環境のあり方を明らかにすることを目的として調査をおこなった。本調査区の一部はすでに過去に調査がすんでおり、またそれ以外にも大学建物の基礎などで、発掘可能な場所は全体の半分にも満たなかったが、縄文時代の地形環境を復元するための層位データや縄文時代の遺物を中心として、整理箱9箱を数える遺物を得ることができた。

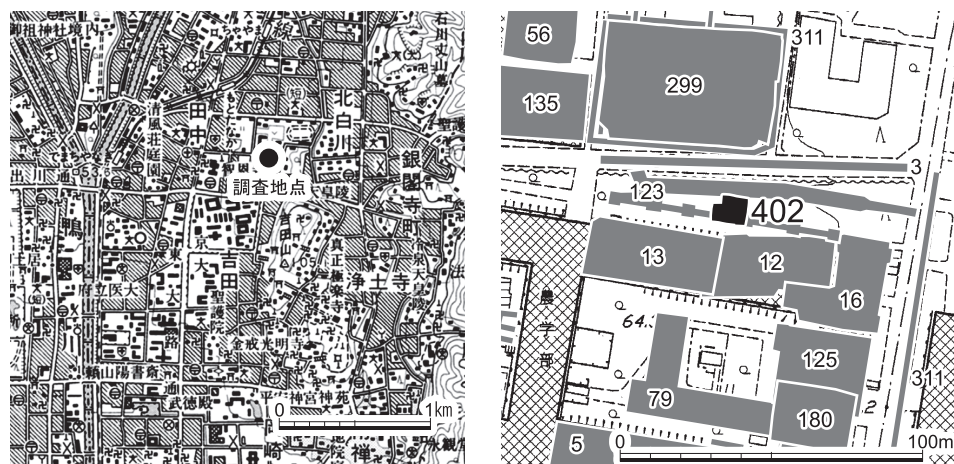


図74 調査地点の位置 縮尺：左1/5万，右1/2500

2 層 位

調査区は攪乱により南北及び東西ともに連続して地層を観察できる箇所が存在せず、また微高地の端部に位置したことにより、複雑な堆積状況を示していた。よって、ここでは、それぞれの断面で観察できた堆積状況を個別に解説し、層位データを総合した上で得られる地形環境については、小結でまとめることにしたい。層位の記録位置は図77、層名の記載は表1に示した。

北区の層位（図75・76） 北壁の層位を図75に、東壁の層位を図76に示した。第1層は表土。第2層は黒褐色土で、古代の遺物を包含する。第3層は黄褐色土。この層は南に行くにしたがって、層が厚くなるとともに黄色砂の量が増えていき、南区北辺中央北壁の第3層（灰黄色砂）に連続する。北区では黄色砂はわずかに混じる程度である。第4層は黒色土。縄文時代の遺物を包含する。第5層は灰褐色砂質土。南に行くにしたがって土壌化していく。第6層は黒褐色土。第7層は黄白色砂。第8層は灰褐色砂質土。第9層は暗灰褐色砂質土。第10層は灰白色砂。第5層以下は遺物を含まない。

南区北西隅の層位（図76） 北壁の層位を図76に掲げた。第1層は表土。第2層は黒色土。層厚0.2～0.3m。縄文時代の遺物を包含しており、上半と下半に分けて遺物を取り上げたが、出土量は上半の方が多かった。第3層以下は無遺物層で、第3層は灰褐色砂質土、第4層は黒褐色砂質土、第5層は黄白色砂、第6層は灰褐色砂質土、第7層は暗灰褐色砂質土、第8層は灰白色の砂・礫である。このうち、第6層は非常に固くしまっており、第7層も固くしまっていた。古い時代の堆積物であることが予想されたため、第5層・第6層・第7層の土壌を採取し、堆積年代を知るために、(株)京都フィッシュン・トラックに依頼して火山灰分析をおこなった。3つの層いずれも、火山ガラスの含有はきわめて少なかったが、含まれる火山ガラスはA TガラスのみでK-Ahガラスは含まれないという結果を得た。したがって、少なくとも第5層以下はアカホヤ火山灰降下以前、すなわち縄文早期以前にさかのぼる堆積物であると判断することができる。

南区北辺中央の層位（図75・76） 北壁の層位を図75に、東壁の層位を図76に掲げた。第1層は表土。第2層は黒褐色土。長石粒を多く含む2 a層とあまり含まない2 b層に細分できる。古代の遺物を包含する。第3層は灰黄色砂。北区の第3層、南区南辺中央の第3層に対比できる。第4層以下第13層までは、部分的に砂層（第5層・第11層・第12層）が介在するが、黒色から赤褐色の土色を呈する腐植土壌の堆積物である。縄文時代の遺物

層 位

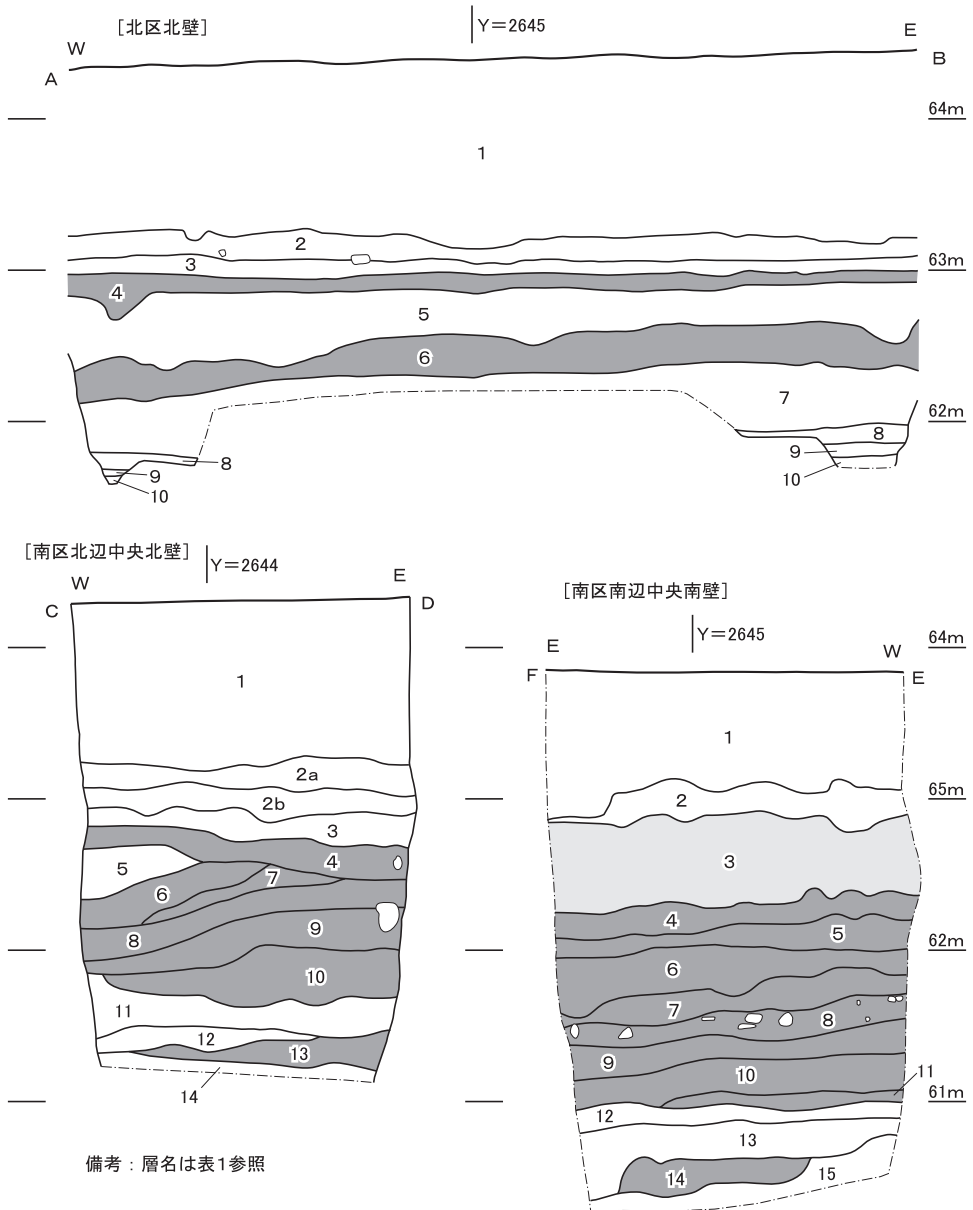


図75 層 位(1) 縮尺1/50

京都大学北部構内B F 32区の発掘調査

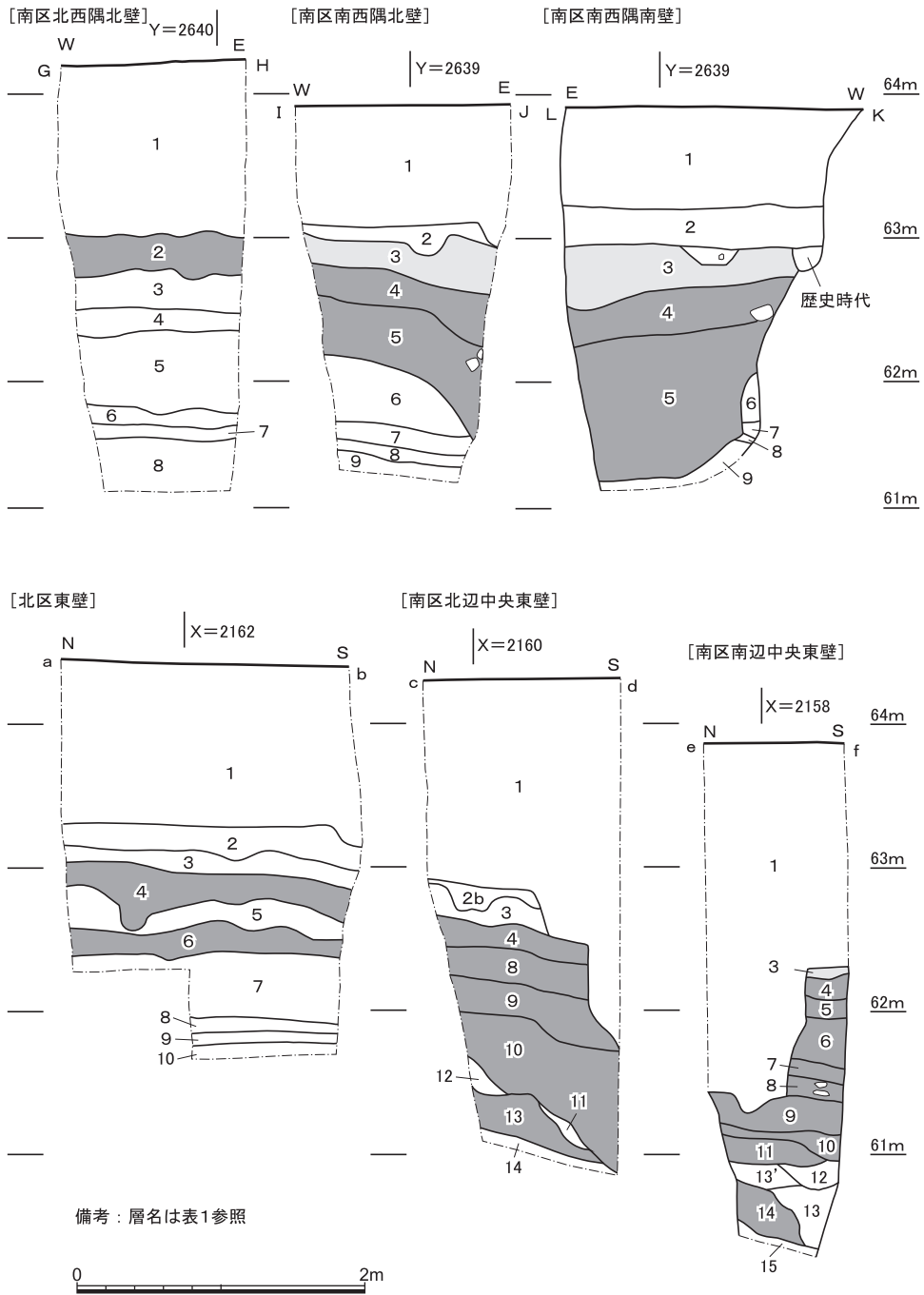


図76 層 位(2) 縮尺1/50

層 位

表1 層位の記載

	〔北 区〕	〔南区北西隅〕	〔南区北辺〕	〔南区南辺〕	〔南区南西隅〕
第1層	表 土	表 土	表 土	表 土	表 土
第2層	黒褐色土	黒 色 土	黒褐色土	黒褐色土	黒褐色土
第3層	黄褐色土	灰褐色砂質土	灰黄色砂	黄 色 砂	黄 色 砂
第4層	黒 色 土	黒褐色砂質土	黒色土①	黒色土①	黒 色 土
第5層	灰褐色砂質土	黄白色砂	黄灰色砂質土	暗褐色土	赤褐色土
第6層	黒褐色土	灰褐色砂質土	黒色土②	黒色土②	黄白色砂
第7層	黄白色砂	暗灰褐色砂質土	褐黒色土	褐灰色土①	灰褐色砂質土
第8層	灰褐色砂質土	灰白色砂～礫	黒色土③	褐灰色土②	暗灰褐色砂質土
第9層	暗灰褐色砂質土		赤褐色土①	灰赤色土	灰白色砂～礫
第10層	灰白色砂		赤褐色土②	赤褐色土	
第11層			黄灰色砂質土	灰褐色土	
第12層			灰黄色砂	暗灰黄色粘質土	
第13層			黒色土④	灰黄色粘質砂	
第14層			灰白色粗砂	黒色土③	
第15層				灰白色粗砂	

や拳大の礫を包含している。上から10cm単位の人工層位で遺物を取り上げた。

南区南辺中央の層位（図75・76） 南壁の層位を図75に、東壁の層位を図76に掲げた。

第1層は表土。第2層は黒褐色土で、上部に長石粒が目立つ。古代の遺物を包含する。第3層は黄色砂で、南壁では厚さ0.6mをはかる。弥生前期末の洪水層である。第4層～第11層はもっとも厚いところで厚さ1.4mをはかる腐植土。色調と遺物の出土状況などをもとにして細分している。上から10cm単位の人工層位で遺物を取り上げた。どの層からも遺物が出土したが、第8層とした褐灰色土からは、5～10cm大の礫とともに縄文土器が多数出土している。一方で、第10層の赤褐色土および第11層の灰褐色土は、包含する遺物はきわめて少なく、縄文土器の細片が少量出土したのみである。

第12層以下は無遺物層で、第12層は暗灰黄色粘質土、第13層は灰黄色粘質砂、第14層は黒色土、第15層は灰黄色粗砂。東壁に認められる第13層は土壌化していて黒みがやや強い。第14層の黒色土は腐植土層であるが、遺物の出土は見られなかった。第14層の黒色土を試料とした炭素14年代測定を（株）加速器分析研究所に依頼したところ、未校正で、 5830 ± 30 B P（IAAA-133680）という測定値を得た。

南区南西隅の層位（図76） 北壁と南壁の層位を図76に掲げた。第1層は表土。第2層は黒褐色土。古代の遺物を包含する。第3層は黄色砂。南辺中央の第3層と同一で、弥生前期末の洪水層。第4層は黒色、第5層は赤褐色を呈する腐植土層。上から10cm単位の人工層位で遺物を取り上げた。第6層は黄白色砂、第7層は灰褐色砂質土、第8層は暗灰褐色砂質土、第9層は灰白色砂で、南区北西隅の第5層～第8層に対比できる。

3 縄文時代の遺構と遺物

(1) 検出遺構 (図版18・19, 図77)

南区では調査できた面積が狭小であったことや当時の地表面が南へ下る斜面に位置していたこともあってか、遺構の確認にはいたらなかった。一方、北区では第4層黒色土を掘削し、下層の第5層灰褐色砂質土上面で、黒色土の落ち込みを捉えることができた。

S X 2 北区南西隅で検出した落ち込み。東側は調査区外、南側は攪乱部分となっており、全体の形状ははっきりしない。西端は直径1.2mをはかる円形状の落ち込みとなっており、この部分は東側の落ち込みを切っているようにも観察できた。検出面からの深さは、東側の最深部で0.5m、西側の円形状落ち込みで0.7mである。出土遺物の多くは中期後葉の縄文土器だが、晩期末の凸帯文土器を1点含んでいる。

S X 1 北区中央から西半で検出した東西に伸びる溝状の落ち込み。最大幅1.2m前後で、調査区外へと続いていたと思われる。検出面からの深さは東側で0.2m前後、西側で0.6m前後をはかる。出土土器は中期後葉が主体を占めるが、晩期末の凸帯文土器を含む。

S X 1・S X 2以外に、北区北壁中央付近で直径0.2mをはかるピット (S P 5)、S X 2の北側で、長径1.1m、短径0.6mをはかる土坑状の落ち込みも確認した。

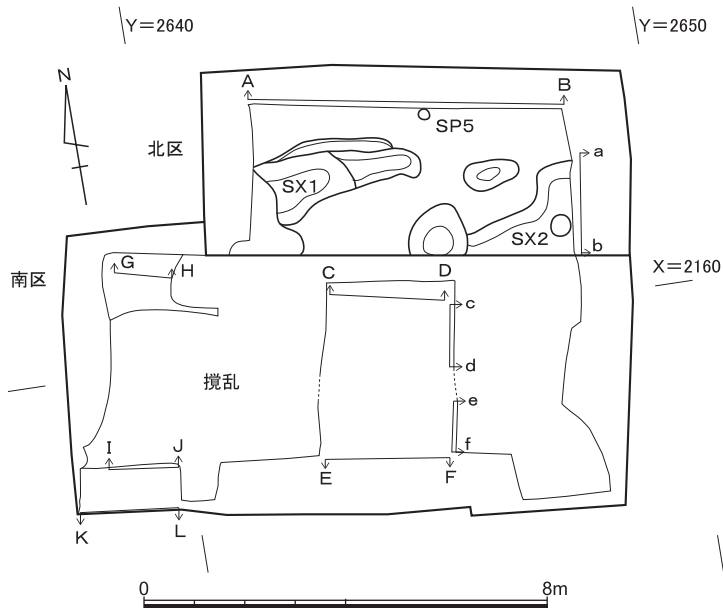


図77 縄文時代の遺構 縮尺1/150

(2) 出土縄文土器の概要

今回の調査で出土した縄文土器は整理箱 8 箱を数える。調査地点の一部が重複している 1982 年度 (123 地点) の調査では、大型の破片が多数出土したとと比較すると、今回の調査では小片の出土が多数を占めた。中期・後期・晩期の土器が出土しているが、主体を占めるのは中期である。型式の比定できる資料は小片も含めて図示するように努めた。また、南区の北辺中央、南辺中央、南西隅に関しては厚い包含層が確認できたため、上から 10cm 単位の人工層位で遺物の取り上げをおこなった。こうして取り上げた遺物は、整理の過程で、壁面の層位図と照合して帰属層位を確定させている。

出土遺物の主体を占める中期後半の土器に関しては、記述の便宜上、船元Ⅲ式を中期中葉、船元Ⅳ式・里木Ⅱ式を中期後葉、北白川Ⅲ式を中期末として解説する。また中期末の器種分類は、『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲの呼称にしたがう。

(3) 北区出土縄文土器 (図版 20・21, 図 78～82)

S X 2 出土土器 (Ⅱ 1～Ⅱ 21) Ⅱ 1～Ⅱ 15 は中期後葉の土器。地文として、深い条と浅い条が 1 条おきにあらわれる縄巻縄文 (深浅縄文: Ⅱ 1～Ⅱ 11) と棒巻縄文 (撚糸文: Ⅱ 12～Ⅱ 15) の 2 種がある。Ⅱ 1・Ⅱ 2・Ⅱ 4・Ⅱ 5・Ⅱ 12 は半截竹管を用いて施文している。Ⅱ 1 はキャリパー形を呈する深鉢口縁部で、地文に縄文を施文後、口縁端部に半截竹管による 2 条沈線を横走させ、その下方に下に開く弧線文を描く。Ⅱ 4 は半截竹管による小波状文を横走させ、弧線文を施している。

Ⅱ 16～Ⅱ 18 は中期末の土器。Ⅱ 17 は体部で渦巻き状の沈線間に刺突を加えている。Ⅱ 18 は屈曲する口縁部の部分で、上下を沈線で画している。

Ⅱ 19 は、波状口縁で、口縁部に 2 列、押引状の刺突をもつ。東海地方の北屋敷式に比定できる。Ⅱ 20 は晩期末の凸帯文深鉢。無刻みの凸帯が貼付されるが、上側のみが撫で整形されている。Ⅱ 21 は底部で平底を呈する。中期末とみられる。

S X 1 出土土器 (Ⅱ 22～Ⅱ 42) Ⅱ 22・Ⅱ 23 は中期中葉の土器。Ⅱ 22 は、地文に 2 段右撚縄文を施文後、内湾する口縁部に隆帯を貼付し、その上から半截竹管で沈線文を加えている。口縁端部は面取りをして内削ぎとなる。Ⅱ 23 は口縁部に縦方向、頸部に横方向の隆帯を貼付する。

Ⅱ 24～Ⅱ 31 は中期後葉の土器で、地文に縄巻縄文を施文する。Ⅱ 32～Ⅱ 41 は中期末の土器。Ⅱ 32 は、口縁部がく字形に屈曲する浅鉢の破片とみられる。押引状の刺突の下には 2 段左撚縄文を施文している。Ⅱ 33 は、深鉢 A 類で、口頸部の境を縄文 (2 段左撚) を施文

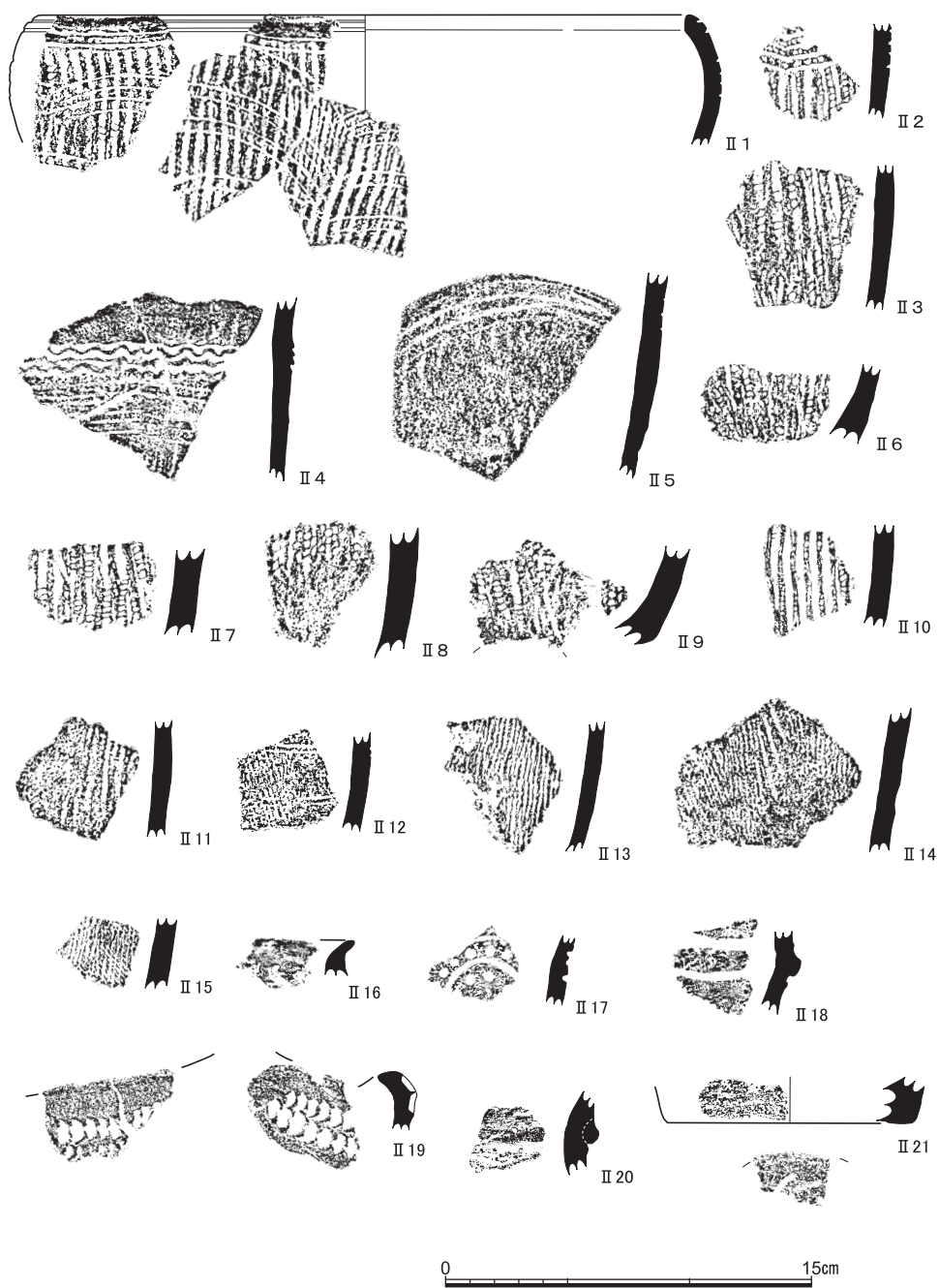


図78 北区出土土器(1) (II 1 ~ II 21 S X 2 出土) 縮尺1/3

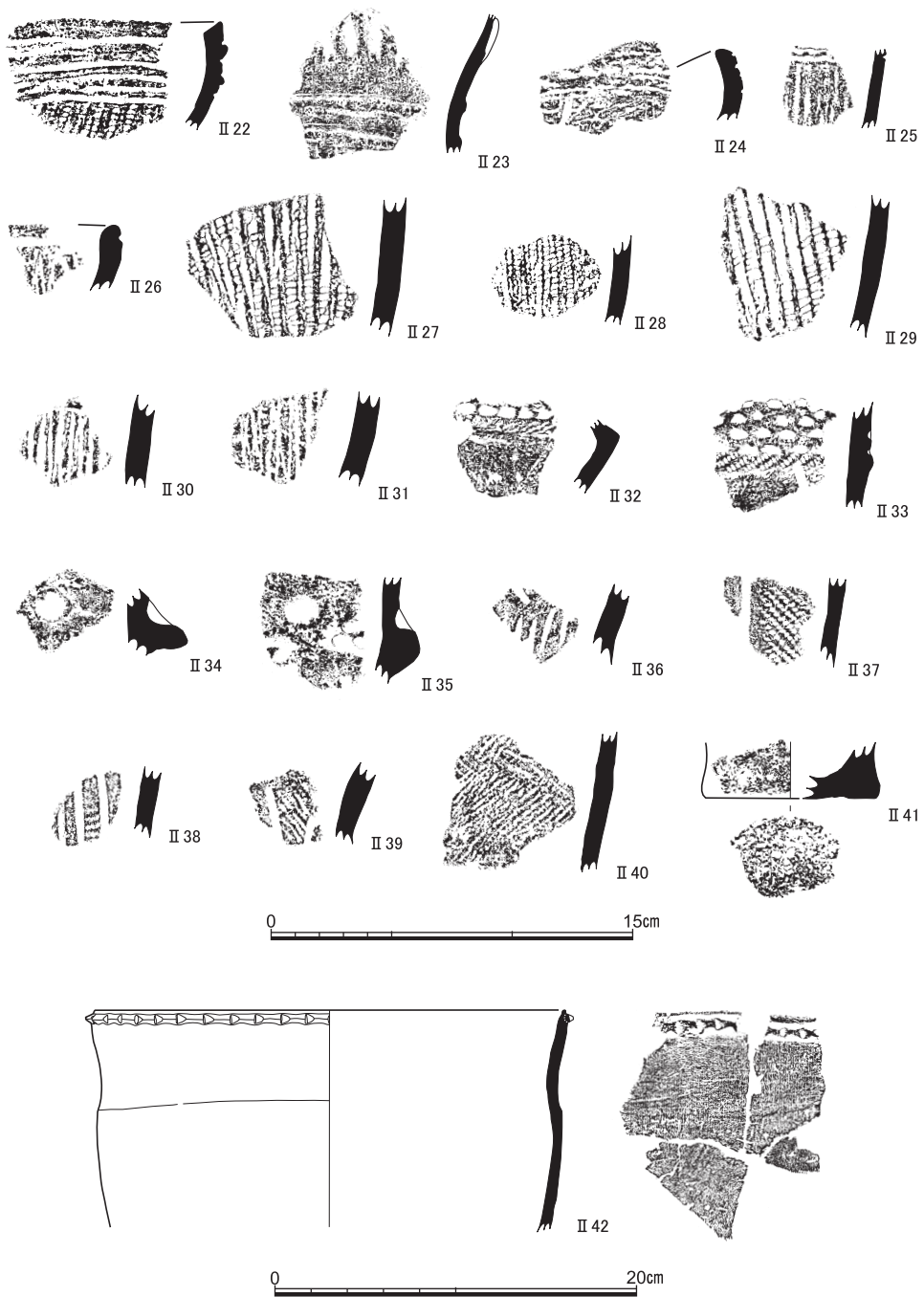


図79 北区出土土器(2) (II 22～II 42 S X 1 出土) 縮尺1/3, 1/4 (II 42のみ)

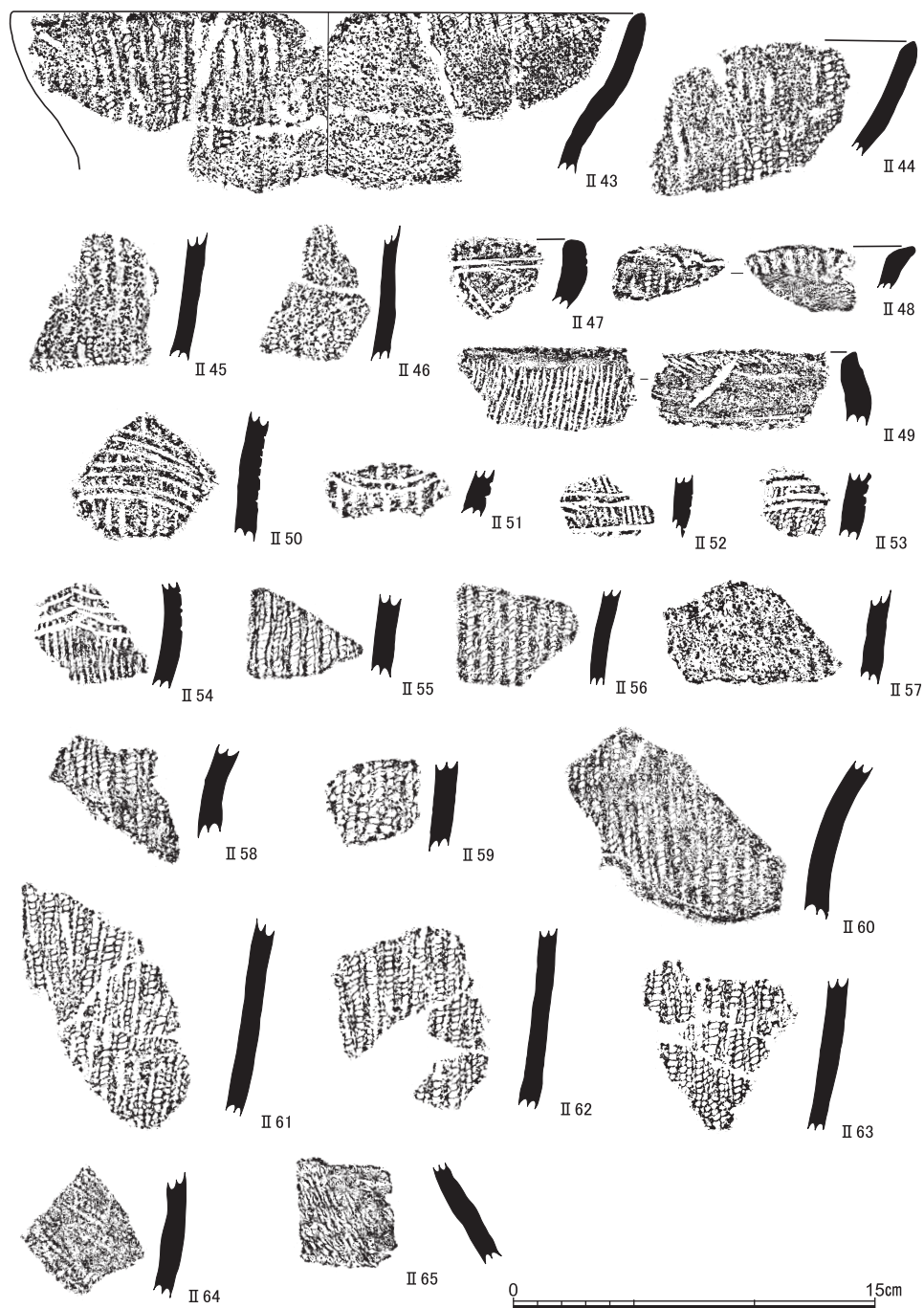


図80 北区出土土器(3) (II 43～II 65第4層出土) 縮尺1/3

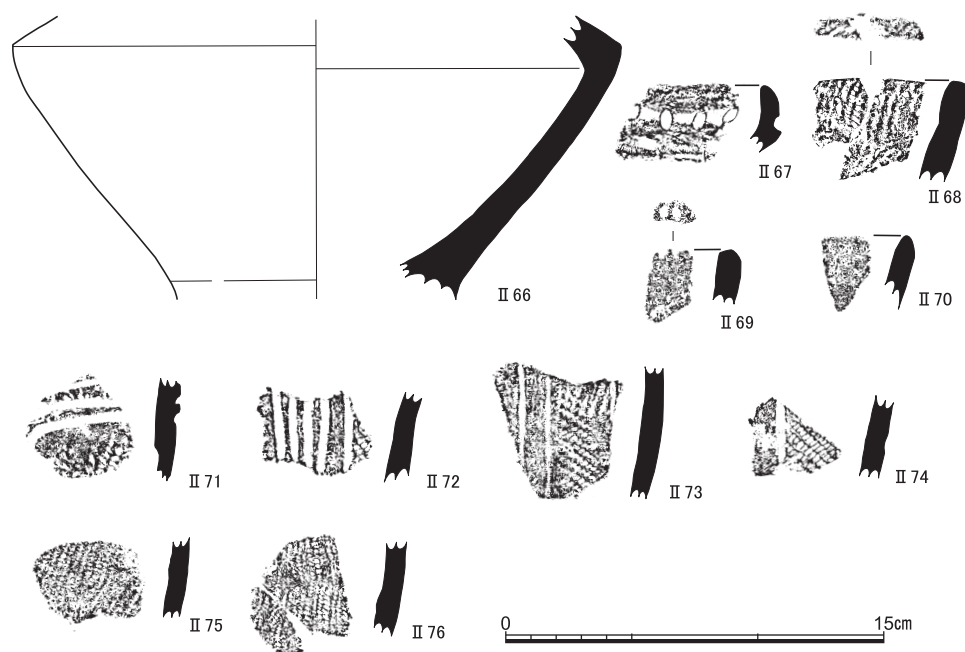


図81 北区出土土器(4) (II 66～II 76第4層出土) 縮尺1/3

した隆帯で画し、口縁部には4段以上の刺突列を加えている。体部に垂下させた沈線の一部が残存している。II 34・II 35は深鉢B類。II 35は楕円形区画内の沈線は押引き施文である。II 41は底部で、平底。

II 42は晩期末の凸帯文深鉢。口径26cm前後をはかり、頸部がややくびれる。頸部は横撫で、胴部も撫で仕上げだが、前段階の削りの痕跡を残している。D字刻みをもつ凸帯は口縁部からやや下がった位置に貼付される。口縁端部は丸く収めている。

第4層出土土器 (II 43～II 76) II 43～II 63は中期後葉の土器。II 47が地文不明、II 49・II 54が棒卷縄文を地文とするほかは、縄卷縄文である。II 43・II 44は内湾する口縁部に縄卷縄文を縦走させ、口縁部内面にも縄文を施文する。II 48も口縁部の内外面に縄文を施文する。II 49は口縁部に棒卷縄文を縦走させ、口縁端部にも同一原体による縄文を施している。

II 66は口頸部がく字形に屈曲する鉢形の土器。屈曲部での径24cm前後。底部は剥離している。内外面とも、粗い磨きで整形している。赤褐色を呈し、器厚は1cmをはかる。色調・器厚・胎土ともに異質であり、在地の土器ではない可能性が高いが、故地を特定できていない。

Ⅱ67～Ⅱ76は中期末の土器。Ⅱ67は深鉢A類で、口縁部に1条の沈線を横走させ、沈線内に刺突を施している。Ⅱ68は口縁部から口縁端部にかけて2段左撚縄文を施文している。Ⅱ69は口縁端部を刻んでいる。

第3層出土土器（Ⅱ77～Ⅱ101） Ⅱ77～Ⅱ87は中期後葉の土器。Ⅱ77は縄巻縄文を地文とし、口縁直下に1条沈線をめぐらし、その下方に半截竹管による弧線文を施している。口縁部内面にも縄文を施文している。Ⅱ79は棒巻縄文を地文とし、半截竹管による小波状文を口縁直下に施し、その下方に弧線文を描いている。

Ⅱ88～Ⅱ99は中期末の土器。Ⅱ88～Ⅱ92は深鉢A類。Ⅱ88は窓枠状の区画沈線をもち、口縁端部に2段左撚縄文を施文している。Ⅱ89～Ⅱ92は口縁部下端に隆帯を貼付して、頸部との境を画している。Ⅱ91の口縁部をめぐる沈線は押し引き状となる。Ⅱ93・Ⅱ94は深鉢B類。Ⅱ93は橋状の把手が剥落した痕跡を残す。把手上部の位置には、円形の押捺を加えている。楕円形の区画には、周回すると想定できる1条の沈線がみえる。Ⅱ94は楕円形区画をつなぐ部分は突起となり、区画に沈線は認められない。突起上部には円形押捺を施文する。Ⅱ95は口縁部と口縁端部に2段右撚縄文を施文する。Ⅱ96は深鉢C類。

Ⅱ100・Ⅱ101は後期前葉の北白川上層式。Ⅱ100は胎土に角閃石を含み、口縁部に右下がりの条線文を施す。Ⅱ101は口縁部が外反し、端部に2段左撚縄文を施文する。

第2層出土土器（Ⅱ102～Ⅱ109） Ⅱ102～Ⅱ105は中期後葉の土器。Ⅱ102・Ⅱ103は摩滅が著しい。Ⅱ102は縦走縄文を地文にもち、Ⅱ103は2条の隆帯を横走させ、口縁端部には縄文を施文している。Ⅱ104は縦走縄文地に半截竹管で文様を描く。Ⅱ105は地文を棒巻縄文とする。

Ⅱ106～Ⅱ109は中期末の土器。Ⅱ106・Ⅱ108は深鉢A類、Ⅱ107は深鉢B類。Ⅱ107は口縁部の外面および内面に2段右撚縄文を施文している。

(4) 南区北西隅出土縄文土器（図版22, 図83）

第2層出土土器（Ⅱ110～Ⅱ118） Ⅱ110は中期中葉の土器。隆帯を横走させ、その上下に半截竹管による小波状文を施文している、地文は縦走縄文である。Ⅱ111～Ⅱ118は中期末の土器。Ⅱ111は深鉢A類で、弧状の沈線束がめぐる。口縁部は短く屈折し、端部内面には2段左撚縄文を施文している。Ⅱ114は深鉢D類。口縁部および口縁端部に横位、体部に間隔をあけて縦位に1段左撚縄文を施文している。

(5) 南区北辺中央出土縄文土器（図版22～24, 図84～87）

第10層出土土器（Ⅱ119～Ⅱ131） Ⅱ119～Ⅱ120・Ⅱ122～Ⅱ129は中期後葉の土器。

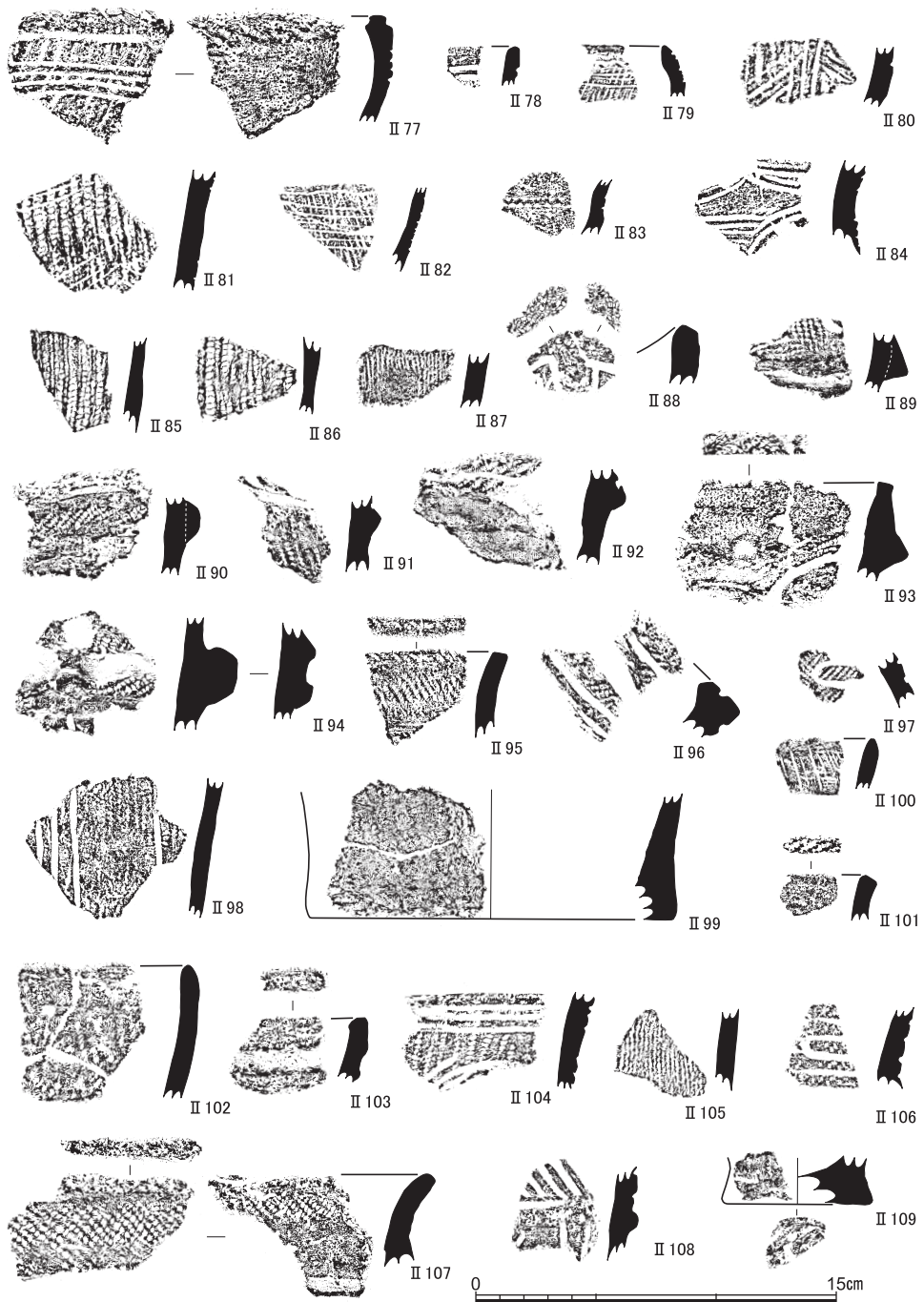


図82 北区出土土器(5) (II 77～II 101第3層出土, II 102～II 109第2層出土) 縮尺1/3

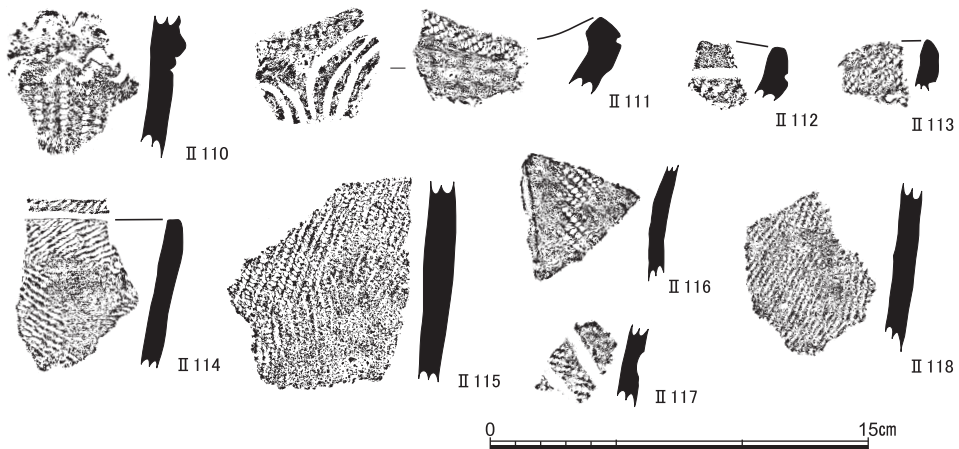


図83 南区北西隅出土土器（Ⅱ110～Ⅱ118第2層出土）

Ⅱ119は波状口縁でゆるやかに内湾する形態。縄巻縄文を地文にもち、幅広い口縁部に隆帯を用いて三角形状の文様を描いている。隆帯は貼付後、半截竹管を用いてその上をなぞっているが、口縁外側端部に貼付された隆帯には半截竹管によるなぞりは認められない。口縁端部には、半截竹管による連続刺突を加えている。

Ⅱ120・Ⅱ123・Ⅱ125・Ⅱ127は、縄巻縄文が縦走する胴部破片。Ⅱ122は外反する口縁部資料で、外面に2段右撚りによる縦走縄文をもち、口縁部内面にも同一原体による斜行縄文を施文している。Ⅱ124は頸胴部境を半截竹管による小波状文で画し、胴部には棒巻縄文を縦走させている。Ⅱ126・Ⅱ128は縦走縄文地に半截竹管による多条沈線を加えている。Ⅱ129は地文に棒巻縄文をもつ胴部破片。

Ⅱ121・Ⅱ130・Ⅱ131は中期末の土器。Ⅱ121は口縁部がやや外反気味に立ち上がる深鉢。口縁部外面と口縁端部に2段左撚縄文を施文している。Ⅱ130は胴部破片で、垂下する沈線と縄文が見える。Ⅱ131は鉢ないしは浅鉢。口縁端部に沈線を1条めぐらしている。同一個体と思われる破片（Ⅱ160）が第9層から出土している。

第9層出土土器（Ⅱ132～Ⅱ162） Ⅱ132～Ⅱ154は中期後葉の土器。Ⅱ132は、地文に縦走縄文を施し、波状口縁の湾曲と並行して隆帯を貼付し、半截竹管をもちいてその上をなぞっている。口縁部内面にも斜行縄文を施文する。Ⅱ133は口縁部内外面に2段左撚縄文を施文する。Ⅱ134・Ⅱ135は口縁部破片で縦走縄文をもち、Ⅱ134はその上に半截竹管による弧状沈線を施文する。Ⅱ138は縦走縄文地に、半截竹管でなぞりを加えた隆帯と垂下する多条沈線を施文している。Ⅱ140は棒巻縄文地に半截竹管による弧線文を施文す

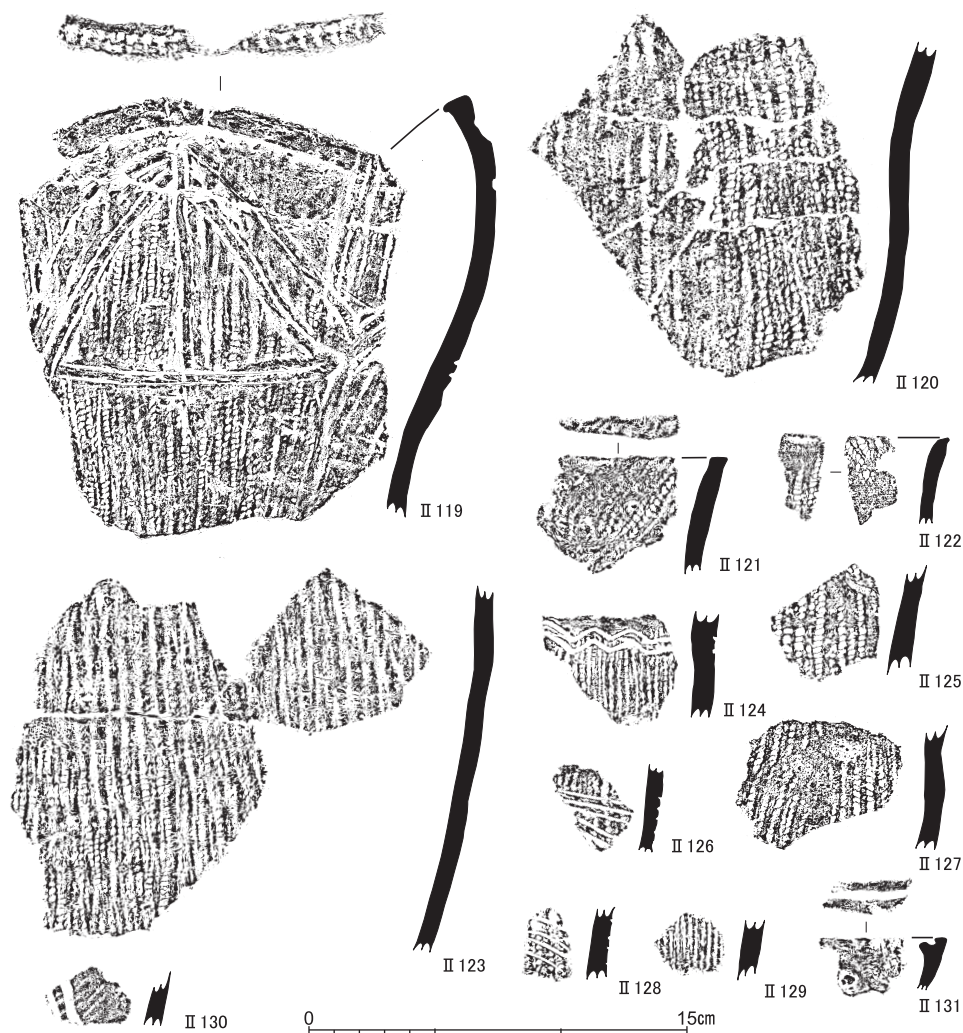


図84 南区北辺中央出土土器(1) (II 119～II 131第10層出土) 縮尺1/3

る。II 143・II 145～II 149・II 153は縄巻縄文を地文にもつ胴部破片。II 152は半截竹管による多条の沈線を垂下させる。沈線は浅く施されている。II 154はゆるやかな波状口縁で、口縁外側端部を肥厚させ、その下方に口縁部に沿って2条の沈線をめぐらしている。地文に2段右撚縄文をもつ。口縁内側端部は、内削ぎ状となる。

II 155～II 160は中期末の土器。II 155・II 156は深鉢A類の口縁部。II 155は口縁端部に2段左撚縄文を施文している。II 158は深鉢C類。口縁端部にも2段左撚縄文を施文している。II 159は口頸部の境を底平な隆帯で画し、隆帯上には指頭状の押捺を施している。

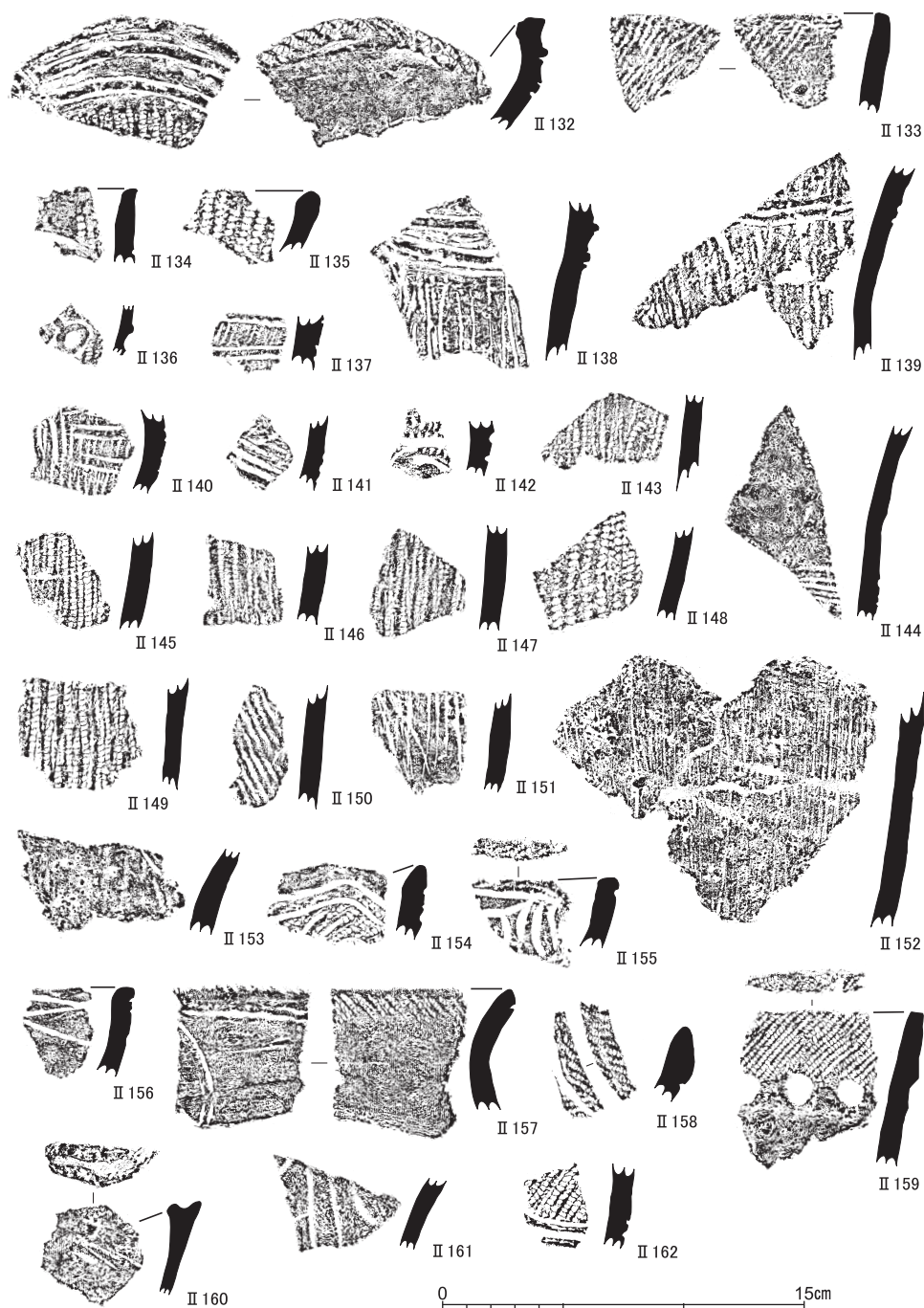


図85 南区北辺中央出土土器(2) (II 132~II 162第9層出土) 縮尺1/3

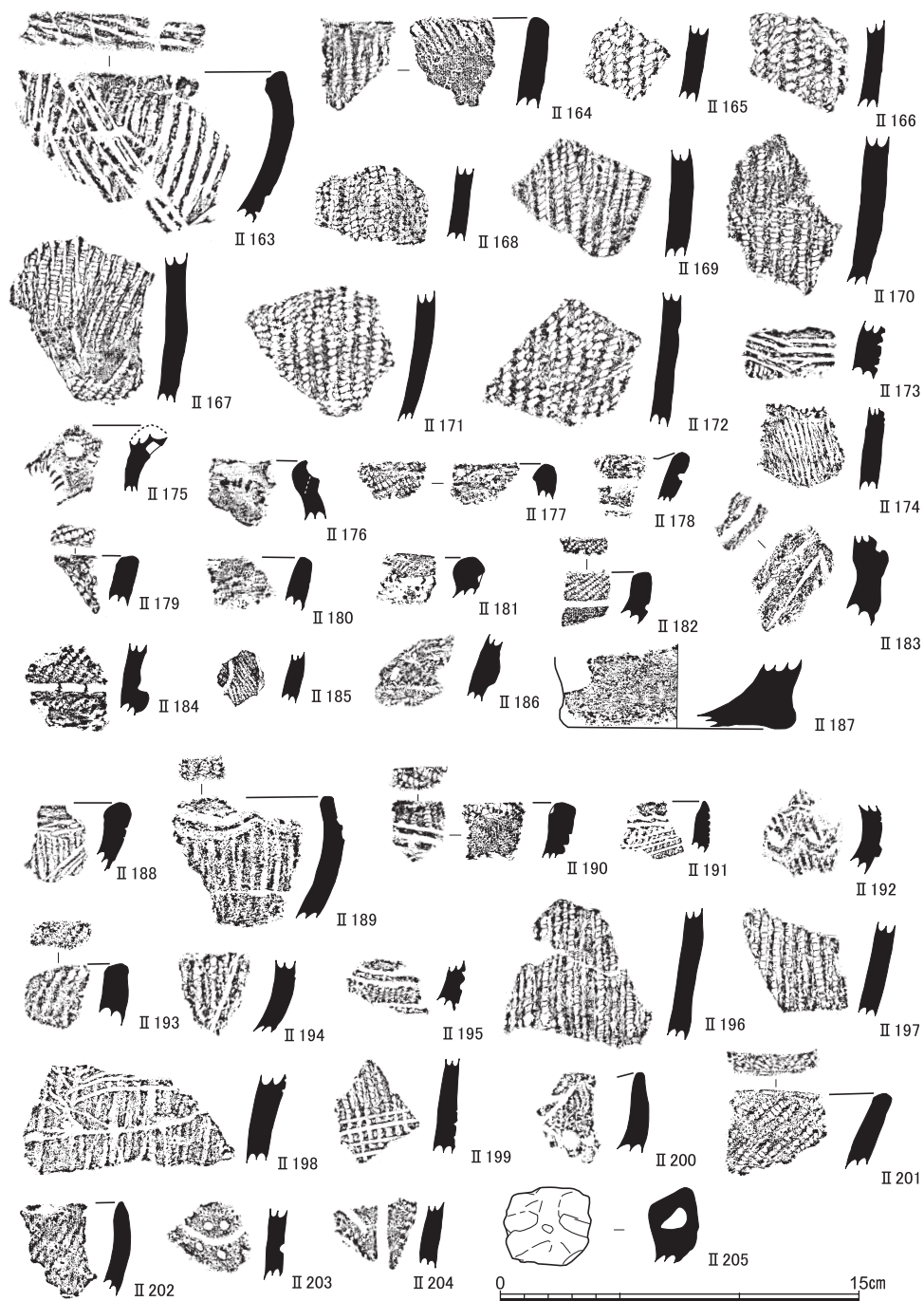


図86 南区北辺中央出土土器(3) (II 163～II 187第8～第6層出土, II 188～II 205第4層出土) 縮尺1/3

口縁部と口縁端部には2段左撚縄文を施文する。

第8層～第6層出土土器（Ⅱ163～Ⅱ187） Ⅱ176は無文地に隆帯を貼付し、Σ字状となる刻みを加えている。前期末～中期初頭に比定される可能性が高い。

Ⅱ163～Ⅱ174は中期後葉の土器。Ⅱ163～Ⅱ172は地文に縄巻縄文による縦走縄文をもつ。Ⅱ163は縄巻縄文を地文とし、半截竹管によるなぞりを加えた隆帯を斜行させている。口縁端部にも縄文を施文している。Ⅱ164は口縁部内面にも縄文を施文している。Ⅱ173・Ⅱ174は地文に棒巻縄文をもち、Ⅱ173は半截竹管による弧線文、Ⅱ174は同一原体によるコンパス文を施文している。

Ⅱ175・Ⅱ177～Ⅱ186は中期末の土器。Ⅱ175は区画を作る沈線を押し引き状に施文している。Ⅱ183は深鉢C類。Ⅱ184は深鉢A類で、口頸部の境を隆帯で区画する。口縁部には2段左撚縄文を施文し、下端に押し引き沈線を横走させる。Ⅱ185は曲線を描く沈線間に2段左撚縄文を充填している。後期初頭に下る可能性もある。Ⅱ186は口頸部の境を隆帯で区画する。隆帯状には2段左撚縄文と円形の押捺が加えられる。

Ⅱ187は底部で、外縁が高台状となり、底面はわずかに凹んでいる。

第4層出土土器（Ⅱ188～Ⅱ205） Ⅱ188～Ⅱ199は中期後葉の土器。Ⅱ188～Ⅱ190は縄巻縄文による縦走縄文地に、半截竹管による弧線文を描いている。Ⅱ191・Ⅱ192は地文に棒巻縄文をもち、Ⅱ192は半截竹管と隆帯表現による波状文を加えている。

Ⅱ200～205は中期末の土器。Ⅱ200は深鉢A類で、区画文を構成する沈線の一部がみえ、円形押捺を施している。Ⅱ205は浅鉢で、口縁部に橋状の把手がつく。

第2層出土土器（Ⅱ206・Ⅱ207） Ⅱ206は内湾する深鉢の口縁部。無文地で隆帯を貼付している。中期後葉。Ⅱ207は垂下沈線と円形刺突の組み合わせ。中期末か。

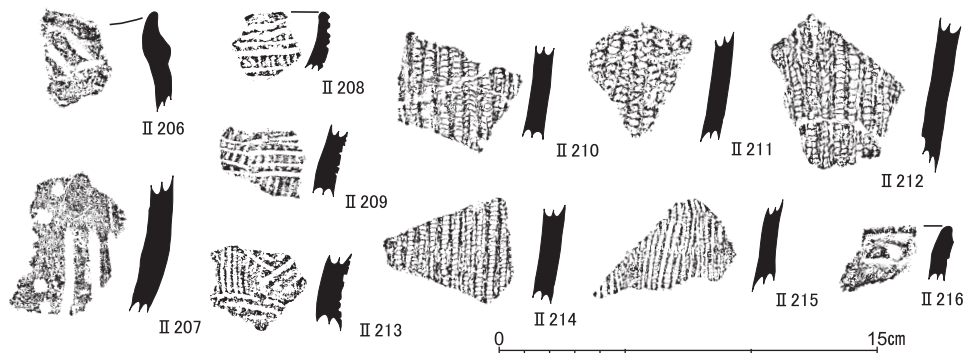


図87 南区北辺中央出土土器(4)（Ⅱ206・Ⅱ207第2層出土），攪乱出土（Ⅱ208～Ⅱ216） 縮尺1/3

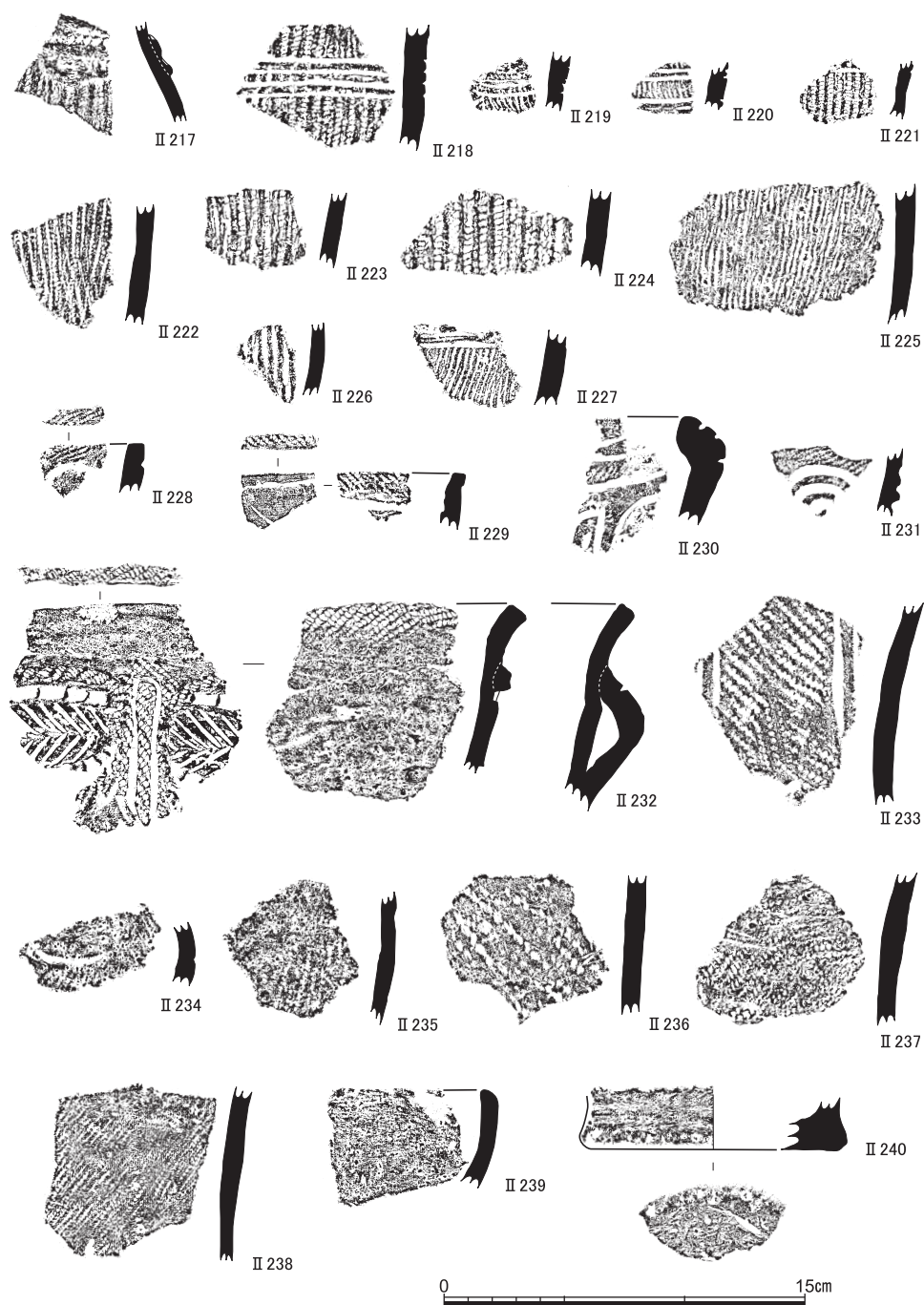


図88 南区南西隅出土土器(1) (II 217～II 240第5層出土) 縮尺1/3

(6) 南区南西隅出土縄文土器 (図版24, 図88・89)

第5層出土土器 (Ⅱ217～Ⅱ240) Ⅱ217～Ⅱ227は中期後葉の土器。Ⅱ217は縄巻縄文かとみられる縄文を縦走させ、隆帯を貼付しその裾に刻みを加えている。Ⅱ218・Ⅱ221～Ⅱ224・Ⅱ226は縄巻縄文による縦走縄文、Ⅱ219・Ⅱ220・Ⅱ225・Ⅱ227は棒巻縄文による縦走縄文を地文にもつ。Ⅱ219・Ⅱ220・Ⅱ227の沈線はいずれも半截竹管によるものである。

Ⅱ228～Ⅱ240は中期末の土器。Ⅱ228・Ⅱ229は深鉢A類。Ⅱ230は深鉢C類。Ⅱ232は深鉢B類。口縁部から下がった位置に隆帯と押引沈線による区画帯を作る。区画内部は綾杉文で充填している。上下の区画隆帯は、橋状把手でつないでいる。隆帯、把手、および口縁端部には2段左撚縄文を施文している。また把手には縄文施文後、沈線で上下方向に細長い区画文を加えている。Ⅱ240は底部で平底。

第4層出土土器 (Ⅱ241～Ⅱ265) Ⅱ241～Ⅱ251は中期後葉の土器。Ⅱ242・Ⅱ243を除き、地文に縄巻縄文を縦走させる。Ⅱ242は内湾する口縁部に棒巻縄文を施し、横走する隆帯を貼り付けている。Ⅱ243は棒巻縄文地に半截竹管による弧状となる平行沈線を施文する。

Ⅱ252～Ⅱ260は中期末の土器。Ⅱ252～Ⅱ254は深鉢A類。Ⅱ252は押引沈線で、横長の楕円形区画文を描き、区画内を2段左撚縄文で埋めている。口縁端部にも縄文を施文する。Ⅱ253・Ⅱ254は隆帯を貼付して口頸部の境を区画している。Ⅱ253は体部を垂下する多条沈線がみえ、Ⅱ254は隆帯上に2段左撚縄文を加えている。Ⅱ261・Ⅱ262は底部。Ⅱ261は底径4cm前後で、中央に向かって凹む。Ⅱ262は底径10cm前後の平底。

Ⅱ263・Ⅱ264は後期の北白川上層式。Ⅱ263は口縁部内面、Ⅱ264は口縁端部に縄文を施文する。Ⅱ265は晩期末の凸帯文土器。刻みを施さない凸帯が口縁からやや下がった位置に貼付される。口縁端部は丸くおさめられている。

第4層上面出土土器 (Ⅱ266～Ⅱ269) Ⅱ266は内湾する口縁部に2段左撚縄文を施文し、円形刺突を加えている。中期末か。Ⅱ267は縄巻縄文が縦走する中期後葉の胴部破片。Ⅱ268は底部で、胴下部は細密条痕で整形している。Ⅱ269は晩期末・凸帯文土器の胴部破片。断面三角形の凸帯を貼付し、凸帯上にD字形になる軽い刻みを加えている。

第2層・第1層出土土器 (Ⅱ270～Ⅱ282) Ⅱ270～Ⅱ274は中期後葉の土器。Ⅱ275・Ⅱ276は無文地に半截竹管による平行沈線を施文している。

Ⅱ275～Ⅱ281は中期末の土器。Ⅱ275は押引による区画沈線をもつ。Ⅱ282は底部。



図89 南区南西隅出土土器(2) (II 241～II 265第4層出土, II 266～II 269第4層上面出土, II 270～II 282第2層・第1層出土土器) 縮尺1/3

(7) 南区南辺中央出土土器 (図版25・26, 図90～93)

第9層出土土器 (Ⅱ283～Ⅱ294) Ⅱ283～Ⅱ289は中期後葉の土器。いずれも縄巻縄文による縦走縄文を地文にもつ。Ⅱ283は口縁外側端部を刻み、内面には縄文を施文している。Ⅱ285は半截竹管による弧状の平行沈線で口縁部を埋めている。Ⅱ286も半截竹管による弧状の平行沈線を加えている。

Ⅱ290～Ⅱ293は中期末の土器。Ⅱ290・Ⅱ291は深鉢A類。Ⅱ290は隆帯で口頸部の境を区画したのち、口縁部には押引沈線で区画文を描き、2段左撚縄文を施文し、下段の横走沈線の途切れた箇所、円形の押捺を加えている。Ⅱ291は幅1.1cmをはかる幅広の沈線が曲線を描き、口縁端部も含めて、2段左撚縄文を施文している。沈線施文部の内面は突出している。

Ⅱ294は胴下部から底部の破片。いったん立ち上がったのち、外へ大きく開く形態を呈している。

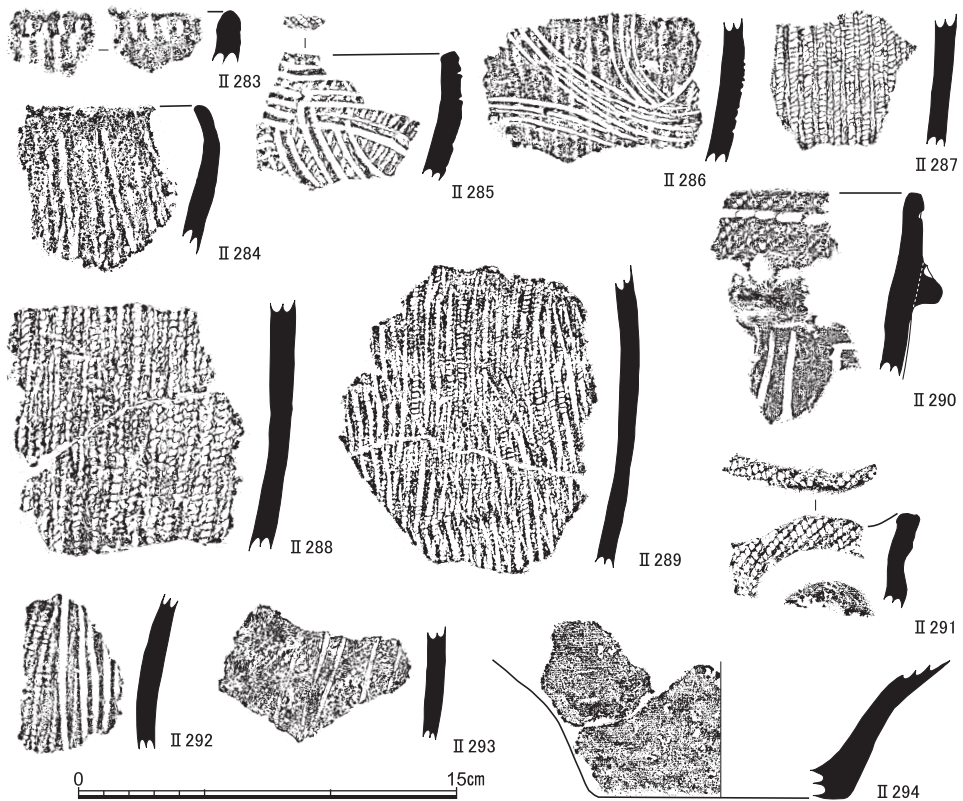


図90 南区南辺中央出土土器(1) (Ⅱ283～Ⅱ294第9層出土) 縮尺1/3

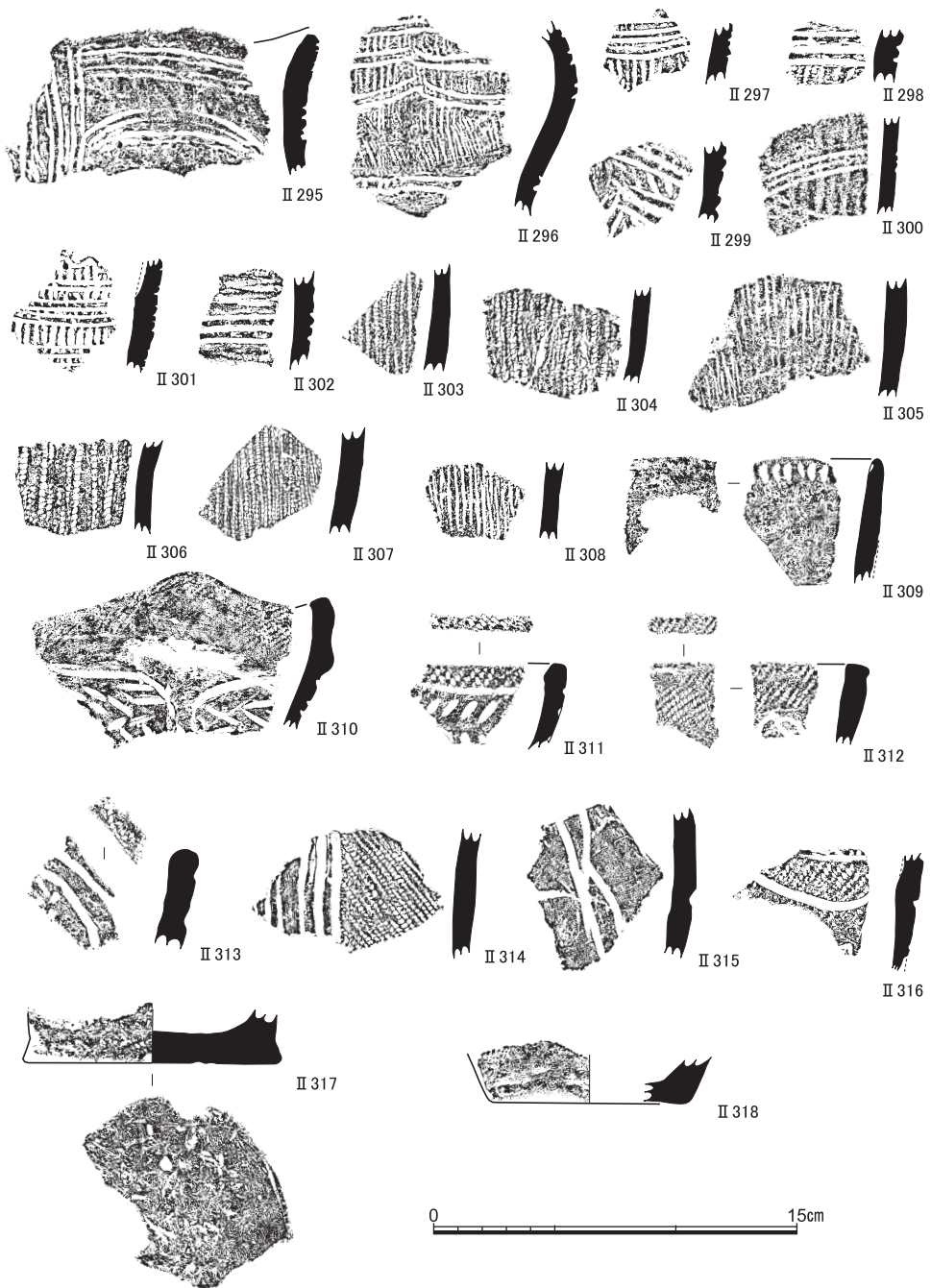


図91 南区南辺中央出土土器(2) (II 295～II 318第8層出土) 縮尺1/3

第8層出土土器（Ⅱ295～Ⅱ318） Ⅱ295～Ⅱ309は中期後葉の土器。Ⅱ295は口縁部がやや外反する形態で、無文地に半截竹管による平行沈線を施文している。Ⅱ296は内湾する口縁部形態で、棒卷縄文を地文とし半截竹管による平行沈線で連弧文を描いている。Ⅱ301も棒卷縄文地に平行沈線を施文しており、拓本最上部は小波状文となる。Ⅱ309は直線的に立ち上がる形態で、外面は無文とし、口縁端部内側にC字形の刺突を施している。

Ⅱ310～Ⅱ316は中期末の土器。Ⅱ310は深鉢B類で、隆帯と沈線で区画した内部は綾杉文で埋めている。口縁部と隆帯の間には、2段左撚縄文を充填している。橋状把手が剥落した痕跡がある。Ⅱ311は深鉢A類で、沈線で区画した内部に綾杉文を施文している。Ⅱ312は口縁部の外面・端部・内面に2段左撚縄文を施文している。

第7層出土土器（Ⅱ319～Ⅱ337） Ⅱ319～Ⅱ321は中期後葉の土器。いずれも縄卷縄文を地文にもつ。Ⅱ319・Ⅱ320は半截竹管による平行沈線で文様を描く。

Ⅱ322～Ⅱ333は中期末の土器。Ⅱ322は深鉢C類で、屈曲した口縁部には沈線で長方形の区画文を描き、波頂部には円形を押捺を縦に2個配している。体部には渦巻状となる沈

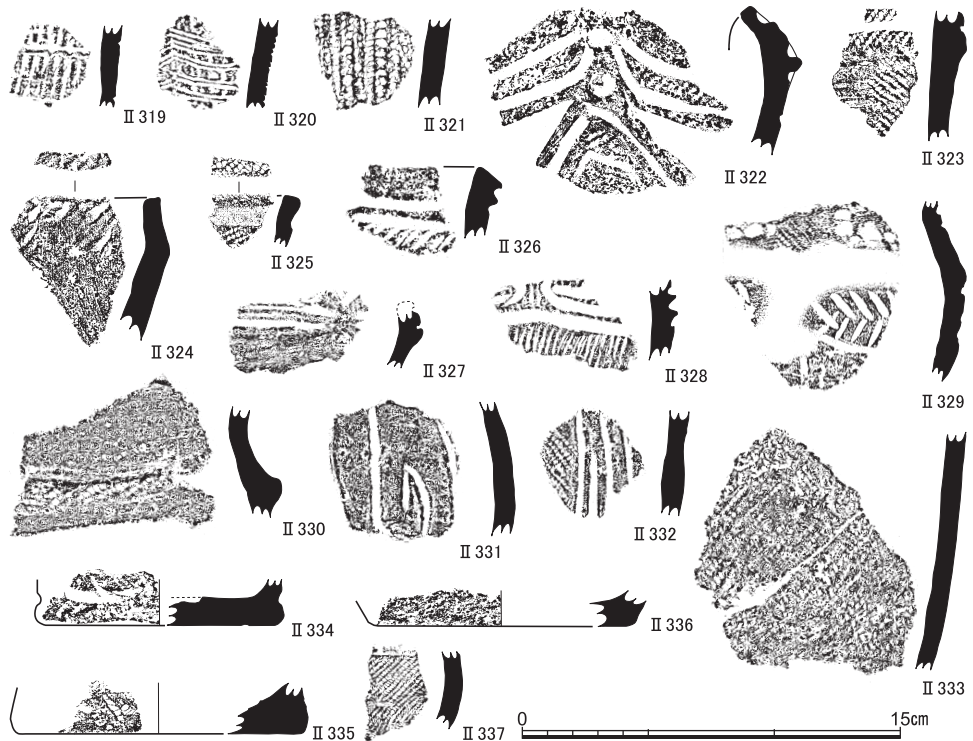


図92 南区南辺中央出土土器(3)（Ⅱ319～Ⅱ337第7層出土） 縮尺1/3

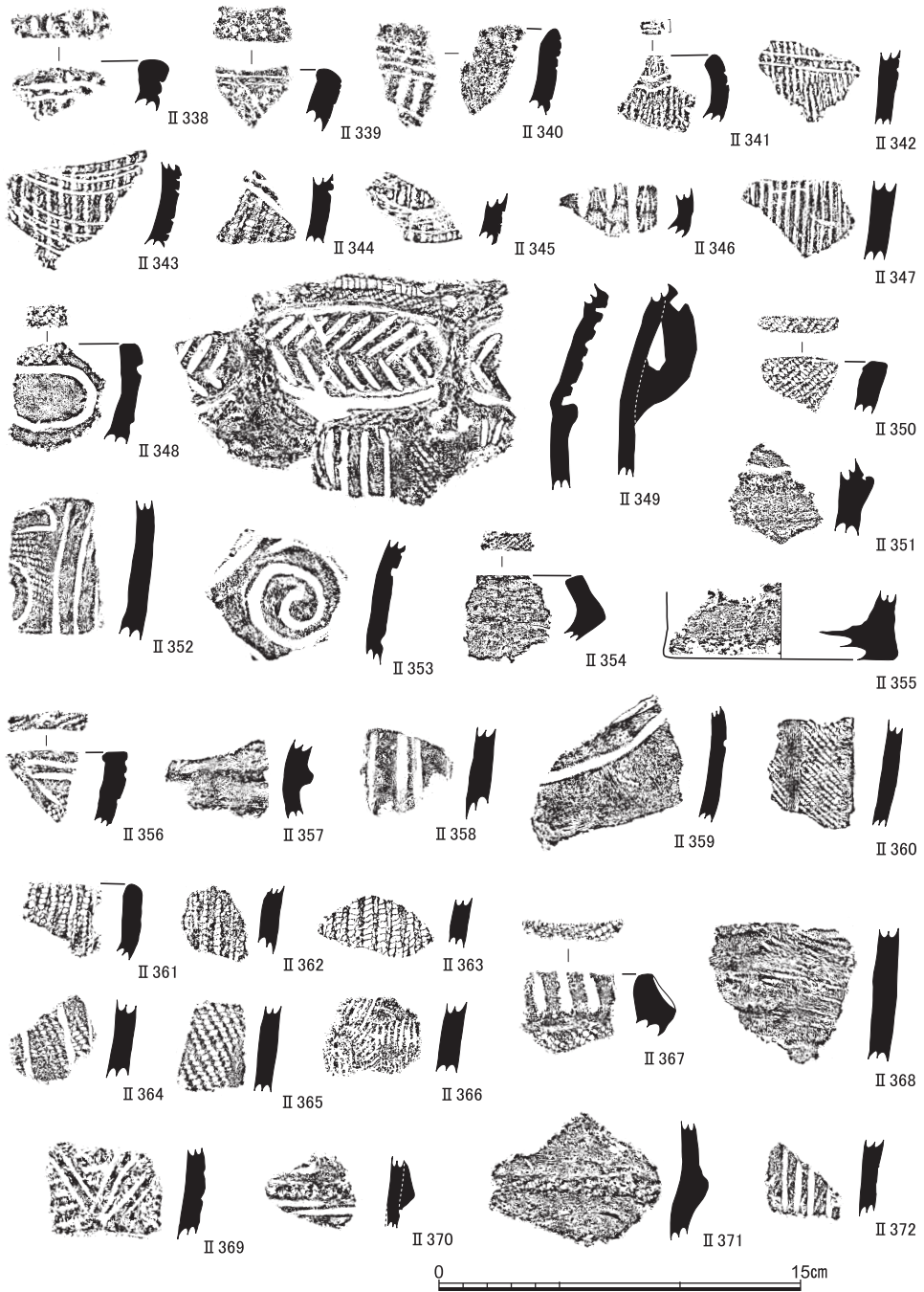


図93 南区南辺中央出土土器(4) (II 338～II 355第7～第6層出土, II 356～II 360第6層出土, II 361～II 368第5層出土, II 369～II 372第4層出土) 縮尺1/3

線がめぐっている。Ⅱ323は深鉢A類で、口縁部は横走する沈線施文後、2段左撚縄文を施文し、体部にも間隔をあけて帯縄文を垂下させている。Ⅱ329は深鉢B類。区画内には綾杉文を施文し、体部にも沈線を垂下させる。Ⅱ334～Ⅱ336は底部。

Ⅱ337は後期の北白川上層式。頸胴部の境を沈線で画し胴部に2段左撚縄文を施す。

第7層～第6層出土土器（Ⅱ338～Ⅱ355） 第7層か、第6層か、出土層位を特定できない遺物である。Ⅱ338～Ⅱ347は中期後葉、Ⅱ348～Ⅱ354は中期末の土器。Ⅱ348は深鉢A類、Ⅱ349は深鉢B類。Ⅱ349は1982年度調査時の破片と接合したため、合わせて図示している。Ⅱ354は短い口縁部が屈曲する浅鉢。Ⅱ355は底部で、平底。

第6層出土土器（Ⅱ356～Ⅱ360） いずれも中期末の土器。Ⅱ356は深鉢A類。

第5層出土土器（Ⅱ361～Ⅱ368） Ⅱ361～Ⅱ363は中期後葉、残りは中期末の土器。

第4層出土土器（Ⅱ369～Ⅱ372） Ⅱ369は中期後葉、Ⅱ370～Ⅱ372は中期末。

(8) 攪乱出土縄文土器（図87）

Ⅱ208～Ⅱ216は攪乱除去時に採集された縄文土器。Ⅱ208～Ⅱ215は中期後葉の土器。Ⅱ216は晩期末の凸帯文土器。凸帯は口縁からやや下がった位置につく。

(9) 石器類（図版26、図94）

礫石器と剥片石器が出土している。礫石器は、切目石錐2点、敲石1点、台石1点からなり、すべて図示した。剥片石器は図示した石鏃・石鏃未製品3点のほか、いわゆる楔形石器や剥片・碎片類が総計41点出土している。楔形石器・剥片の材質は、不明石材1点を除きサヌカイトで、肉眼観察では二上山産サヌカイトが主体を占めるが、金山産サヌカイトも3点認められる。

Ⅱ373は凹基式石鏃。脚部の一端を欠損する。肉眼観察では、材質は二上山産サヌカイト。南区南辺中央の第7層ないしは第8層出土。Ⅱ374は凹基式の細身の石鏃。脚部の一端と先端部を欠損する、肉眼観察では、材質は二上山産サヌカイト。南区北西隅の第2層上半出土。Ⅱ375は石鏃の未製品。チャート製。南区南西隅の第4層出土。

Ⅱ376・Ⅱ377は切目石錘。Ⅱ376は完形品で、重さ44.7gをはかる。南区南辺中央の第7層ないしは第8層出土。Ⅱ377は半分程度を欠損しており、現重量60.1gをはかる。南区南西隅の第4層出土。

Ⅱ378は敲石。縁辺部の3カ所に敲打した痕跡が観察できる。150.9gをはかる。南区南西隅の第4層出土。Ⅱ379は台石。平坦面の一部に敲打の痕跡が認められる。現重量1240g。南区南西隅の第5層出土。

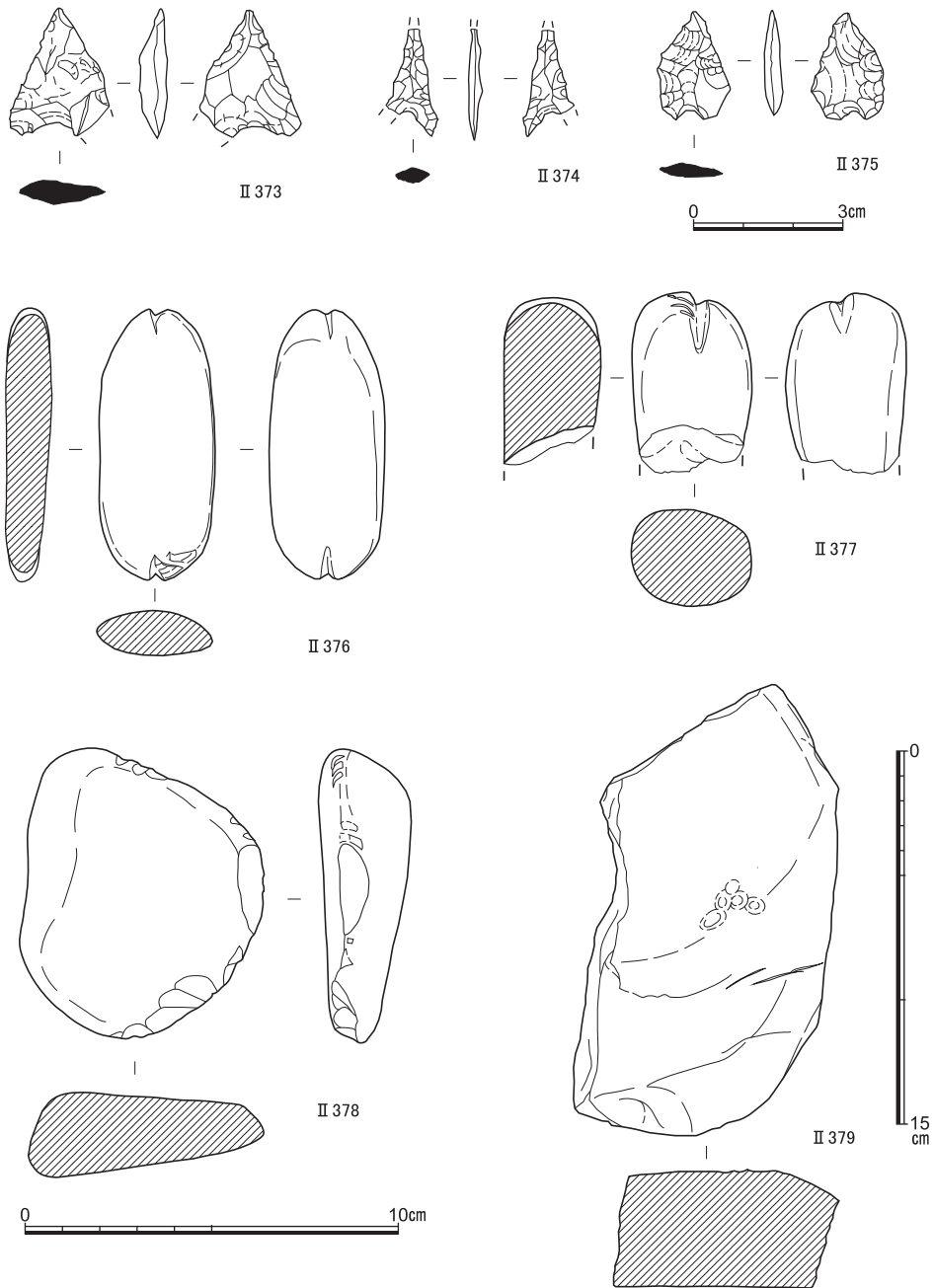


図94 石器 (II 373・II 374石鏃, II 375石鏃未製品, II 376・II 377切目石鏃, II 378敲石, II 379台石)
縮尺 II 373～II 375 : 2/3, II 376～II 378 : 1/2, II 379 : 1/3

4 古代の遺構と遺物

(1) 検出遺構 (図95)

北調査区では黄褐色土上面, 南調査区では黄色砂上面で, 黒褐色土を埋土とする土坑やピットを検出した。土坑SK1は南調査区南辺中央で検出。東西幅0.8mで, 南北端はともに攪乱で失われている。検出面からの深さ0.25m。溝の可能性もあるが, 南区北辺中央では認められなかったので, そこまでは伸びることはない。

ピットは北区で直径0.2m前後の小穴が見つかったほか, 南区では直径0.3m~0.6m前後の小穴が検出されたが, 並びなどを復原することはできていない。

(2) 出土遺物 (図96)

Ⅱ380は土師器碗。体部を粗く磨き, 口縁部は横撫でで, 仕上げている。北区の第2層出土。Ⅱ381は土師器皿。内外面とも, 撫で仕上げ。北区の第2層出土。Ⅱ382は土師器盤の底部。底径21.5cmをはかる。南区の攪乱出土。Ⅱ383は土師器高杯の脚部。端部が内側にやや肥厚する。南区南辺中央の第2層出土。Ⅱ384・Ⅱ385は土師器甕。口頸部は内外とも撫でており, 体部内面は横方向の刷毛目, 体部外面は縦ないしは右下がりの刷毛目を施している。Ⅱ384は南区北辺中央の第2層出土。Ⅱ385は南区南辺中央の第2層より出土し

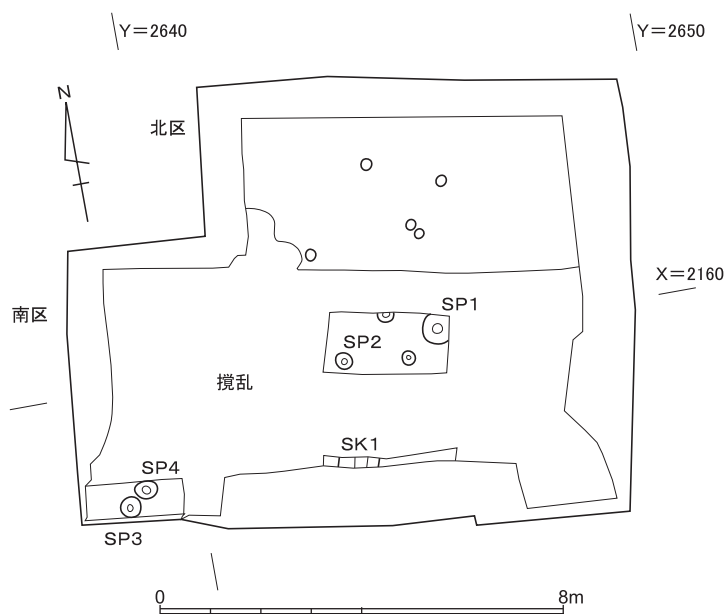


図95 古代の遺構 縮尺1/150

小 結

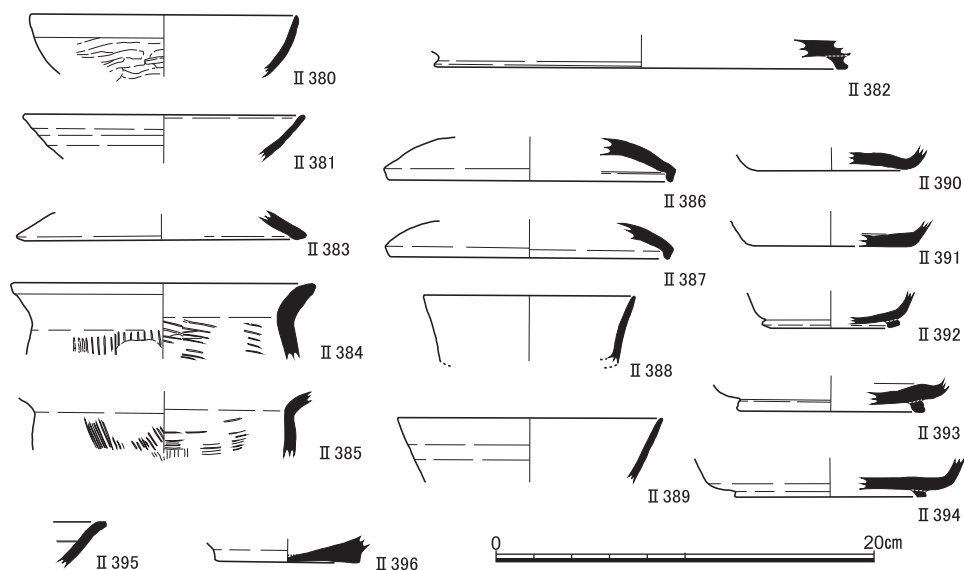


図96 古代の遺物（Ⅱ380～Ⅱ385土師器，Ⅱ386～Ⅱ394須恵器，Ⅱ395・Ⅱ396緑釉陶器）

た。

Ⅱ386・Ⅱ387は須恵器の蓋。口径は14.5～15cm。口縁端部が下方に折れ曲がっている。Ⅱ386は北区の第3層出土。Ⅱ387は南区北辺中央の第2層出土。Ⅱ388～Ⅱ394は須恵器杯身。Ⅱ388・Ⅱ389は底部を欠損する。Ⅱ390・Ⅱ391は高台をもたない杯A，Ⅱ392～Ⅱ394は貼り付け高台をもつ杯Bである。Ⅱ393は焼きがあまい。Ⅱ388・Ⅱ390・Ⅱ392は南区北辺中央の第2層出土。Ⅱ389・Ⅱ394は北区の第2層出土。Ⅱ391・Ⅱ393は北区の第3層出土。

Ⅱ395は緑釉陶器碗の口縁部。外反し口縁端部を上方へつまみ上げる。胎土は硬質。北区の第2層出土。Ⅱ396は緑釉陶器碗の底部。底部は削り成形で、上げ底状となる。胎土は軟質で全面に施釉している。南区北辺中央の第2層出土。

5 小 結

発掘面積が100㎡に満たず、また攪乱や過去の調査範囲と重複している箇所があったため、実質的に発掘できた面積はその半分以下ではあったが、縄文時代の地形環境を復原する層位データを得られたことが今回の調査の最大の成果であったと言える。

調査地点は、北東から南西方向へ向かって張り出す微高地の南西側末端に位置している

ことが調査区壁面の層序から明らかとなった。それぞれの層序は第2節において詳述したのでここでは繰り返さないが、縄文時代の包含層および基盤を形成する砂層の堆積状況から、調査区のほぼ中央付近を境にして、北東から南西方向へ向けて微高地が張り出し、調査区の中央付近から南東方向へ向かって、微高地の末端が急激に落ちてゆく崖面が形成されていたことが確認された。本調査区の北側および西側で検出されている縄文中期末の住居跡〔清水1984〕は、この微高地の南辺、南東側に低地部をのぞむ地点に占地していたことが改めて確認されたことになる。

微高地南東側の崖面には厚く腐植土が堆積しており、その厚みは南区南辺中央で1.5mに達していた。同地区のもっとも下位で確認できた遺物を包含しない黒色土（南区南辺中央第14層）を試料としたAMSによる炭素14年代は 5830 ± 30 BP、較正年代は6731–6556 cal BP（ 2σ : 95.4%）であった。これは縄文前期初頭ごろの年代であり〔小林2008〕、この頃までにはこの崖面が形成されていたことが推測できる。一方、扇状地の基盤を形成する砂層の年代を知るために、南区北西隅の第5層～第7層の火山灰分析を実施した。その結果、いずれの地層からもAT火山灰は認められるけれどもアカホヤ火山灰は未検出という結果を得た。したがって、これらの砂層の堆積はアカホヤ火山灰降灰（約7300年前）以前に遡ることを示している。この数値は、崖面最下位の黒色土の年代と整合的である。

今回の調査で得た遺物の多くは縄文時代の遺物であり、その中でも中期後葉（船元Ⅳ式・里木Ⅱ式）および中期末（北白川C式）の土器が主体を占めていた。南区では、厚い腐植土層に遺物が包含されていたため、厚さ10cm単位の人工層位で遺物を取り上げ、整理の過程で壁面で観察できた層序との対応をはかった。その結果、南区北辺中央第9層あるいは南区南辺中央第9層のように、包含層の下位層からも、中期後葉の土器とともに中期末の土器が出土していることを確認した。これらが上層からの落ち込みなどの混在ではないとすれば、遺物を包含する斜面に堆積した厚い腐植土は、中期後葉の多くの遺物を巻き込みながら中期末の時期に形成されたということになろう。

発掘調査と資料整理は千葉豊が担当し、発掘と整理を通じて、長尾玲・磯谷敦子・河野葵・上阪航・高野紗奈江が測量・実測などの作業にあたった。また、縄文土器に関して矢野健一氏、石器に関して上峯篤史氏・高木康裕氏に有益なるご教示をいただいた。末尾ながら、記してお礼申し上げます。